

特集にあたって

福田正人*

新型コロナウイルス感染症の流行は、世界史の年表に残る出来事となるでしょう。本特集「新型コロナウイルス感染症ただなかの精神医療」を企画したのは、緊急事態宣言下の4月の編集委員会でした。執筆に取り組んでいただいたのは第二波となった夏の期間で、序文を書いている年末の今は、第三波の渦中にあります。

特集の依頼にあたり、「東日本大震災の時がそうであったように、完成したまとめとしてではなく、現在進行形の体験談や実践記録や今後への希望についての、貴重な記録となることを願っている」とお書きしました。そうお願いした通りの原稿を、お寄せいただくことができました。

医療機関の取り組みをおまとめいただいた、総合病院(高橋晶)、自治体病院(北村立)、大学病院(森田健太郎)、精神科病院(野木渡)、クリニック(三木和平)の原稿からは、それぞれの現場の緊迫感が伝わってきます。行政や地域の課題を解説いただいた、厚生労働省(寺原朋裕)、精神保健福祉センター(藤城聡)、児童青年(小平雅基)、地域生活支援(増田一世)からは、医療を取り巻く広い世界が見えてきます。当事者(宇田川健)、家族(本條義和)、治療スタッフ(高橋晶)の語りからは、「私の体験」としての新型コロナウイルス感染症がうかがわれます。[いずれも筆頭著者、敬称略]

新型コロナウイルス感染症には、個人の罹患であると同時に対人接触による感染であり、急性期と慢性期が入り交じる経過をたどり、医療の問題でありかつ社会・経済の問題でもある、という特徴があります。これらは、精神疾患そのものの特徴に良く似ています。そうでありながら精神疾患は、「いつでもどこでも対象外」となりがちです(本條原稿の当事者の言葉)。そこに、取り組みの難しさがあります。

「平常時に行わないことは、災害時にも行えないことは当たり前であり、災害に備えるとは平常時から実行することである」「非常時のケアは平時のケアが凝縮されたものである」、これは東日本大震災の困難を現地で経験した方々の総括です(丹羽真一 2012, 2013)。新型コロナウイルス感染症の流行についても、この教訓は真実であると感じています。

* 群馬大学大学院医学系研究科神経精神医学(☎ 371-8511 群馬県前橋市昭和町 3-39-22)